

2020年度 須坂市小中学校のあり方検討会議 第3回 会議録（公開用）

日時 令和2年(2020)10月26日 9:30~12:00

場所 須坂市役所305会議室

1 開 会（関教育次長）

2 あいさつ

教育長：

- 前回までの話題と、皆様からのご意見が、私にとって大きな刺激となった。
- 皆様からいただいた意見を踏まえて書いた、教育指導時報の寄稿文のタイトルを「どの子ども教師に『IとYouの関係』を求めている」とした。
- 須坂市が、少子化の中で、どういった学校の規模、人数、学びのあり方が子どもたちにとって相応しいのか、地域の問題として考えていきたいと考えていたが、もっと考えると、子どもにとって、学校と、先生が、自分のことを「私とあなたとの関係」で見えてくれるという安心感とか信頼感が、学びの原動力になる。
- 教室の中で「全員の中の1人」と思うのと、どんなに遠くの席に座っていても、先生と自分の関係は「IとYouの関係」なんだという風に思うのでは、子ども学びに向かう姿勢は全然違う。
- 先日、飯田市の上村小学校を視察した。全校児童19人の学びの場が展開されている。非常に感動したのは、先生と子供の間は「IとYouの関係」なんだということ。人数が少ないからできないという事を誰も思っていないということ。
- 小さな学校でも、ICTを活用しながら素晴らしい学びが展開されていた。
- 自分は学校規模の問題を大事に思っているが、もっと大きな子どもたちの学びというもの、例えば場の環境のこと、そして小さい時から大きくなるまでの間の、縦の環境という事も含めた、もっと幅広い「環境」というものの意味を問い続けていかなければいけないという事に気づかせてもらった。
- 今回と次回の2回のプレゼンと、伏木先生の助言をいただきながら、広い意味での須坂市の小中学校の学びの環境がどうあったらいいのかについて、模索して、皆さんの知恵を拝借したいと思っている。

3 議 事

(1) 委員によるプレゼンテーション

①垂澤優樹委員

テーマ「コロナ禍の中で見えてきた成果と課題 ～幼児教育の意義とは～」

●幼稚園の現状について

●運動会に焦点を当てて考えてみて、結果的に良かった点を挙げてみると、

主体性：リレーの順番等、子どもたちが自ら決める事が増えた

仲間意識の芽生えや、友達を思いやる気持ちなど、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が見えた

継続性：自粛期間中に縄跳びを持ち帰ってもらい、それぞれのペースに合わせて

取り組めるようにした結果、自発的に縄跳びに取り組む児童もいた

家庭との連携：縄跳びなど学びの場を家庭にも持ち帰ってもらったことで、家庭

と連携した一体感のある運動会ができた

●成果として、子どものために必要だったのかと、改めて問い直せた。「主体性」「継続性」「家庭との連携」が幼児教育の原点だと改めて気づかされた。

●課題は、3年、5年という長期でのスパンの覚悟。元の形に戻る必要があるのだろうかという問い。

●教職員の働き方改革として、行事の見直しと共に、業務の見直しができないかと考え、取り組んでいる。

●幼稚園が抱える4つの課題（結婚退職、女性職場、人員不足、給料安）に対し、国による処遇改善と並行して6つの改善（就業規則の整備、産休・育休の整備、変則労働時間制導入、行事のスリム化、業務内容の見直し、ICTの積極導入）に取り組んでいる。

●成果として、コロナを機に、土曜参観を平日に分散させることで、変形労働制に頼らずに週休2日制を確立できた。

●課題は、教職員の研修の場の確保と、ICT化の遅れ。ICTは機器が導入できてもソフト面が弱い。

●コロナは今まで変えることができなかつたことにチャレンジするチャンスと、前向きにとらえたい。アフターコロナの教育こそが大事。

②羽生田秀子委員

テーマ「幼児教育現場から見た今後の幼児教育」

●今は保育園にグランドデザインがある。「いのちを大切にし、生きる力を育む」を共有理念としている。

●保育・幼児教育で大切なことは、子どもたちが「愛されている」と実感し、遊びの中で主体的・対話的な学びを深めること。

●2018年の保育指針の改訂の一番の目的は、保育・幼児教育と小学校以降のつながりを一層深めることにあり、遊びのプロセスこそが主体的・対話的で深い学び

そのものとしている。

- 最近懸念していることは、スマホ、DVD、タブレットが子どもたちのおもちゃとして定着していること。保育園の子の言動からも、スマホなどで遊んでいることが見えてくる。
- 自分が保育士だったころはクレヨンしんちゃんの言葉で困ったが、今は乱暴な言葉使いでの遊びが多く見受けられる。
- 自分の気持ちを伝えられない子や、親に気をつかう子も、愛着表現力の低下として気になっている。
- 保育現場で懸念していることは、やさしい、きれいな、温かな言葉かけや関わりがスムーズにできない保育士もみられる。園内研修や研究会等の学習の機会をこれまで以上に作っていく事を検討したらどうか。事例発表が一番大きなポイントだと思っている。
- 保護者についての懸念では、4年前に支援センターに来た2歳の子が、母親の横でスマホを操作していたこと。支援センターには魅力的な遊び道具やお友達もいるのに、スマホに向かって巧みに指を動かしていたので、その時はスマホが一番の遊びにならないように話をさせていただいた。
- 親の中には、他の親が子どもにスマホを触らせるのを見たり、これからはデジタル化の時代だというニュースを見て不安になり「小さい時からスマホなどを触らせた方がいいのでしょうか？」という相談をしてくる人もいる。
- 親には、子どもにとって今、何が一番大切なのかを理解していただき、子どもとの関わり方、ゲーム、スマホ等の扱い方を理解してもらうことが非常に大事。この問題に対して、これからの親との話し合いに活かしていきたいと考えている。
- 支援センターや、保育園・幼稚園では、親の顔を見ながら相談に乗ることができる場所。又、親育てをする大切な所である。保育士もいろいろなスキルを身に付けながら対応していく事が一番大事だと思う。
- ICTの導入によるメリットの反面、人との直接的な関わりが益々減少していく事を心配する。
- コロナ禍の児童センターにいて、何か子どもたちがおかしいと感じたのは、制限なくゲームをしている様子があること。またちょっとでも体に触れると「先生セクハラ」と言ってきたり、カマキリにバッタをわざと食べさせたり、ダンゴムシを踏んだり、今までは無かった子どもたちの行動が見られるようになった。
- そんな中で、愛情をもって子どもたちに触れ合う体験ができる場が保育園であったり、幼稚園であったりする。そこを大事にしなければと強く思った。
- 0歳から18歳まで、小中学校間も含めて、ICTを使って、一貫した情報伝達と

指導の継続性ができないか。

- 子育て講座に親世代がなかなか出席できない。保育園で開催している子育てセミナーも参加者が多くないが、セミナーで話した内容がどこかで役に立つかもしれないので、地道に続けて欲しいと思う。
- 須坂市では農業小学校などで地域を巻き込んだ事業を行っているが、ボーイスカウト的な自律的な活動もやっていったらいいと思う。
- 子どもたちが問題を起こした際には、愛情と時間をかけて、子どもたちに考えさせることを絶えず心掛けたい。こちら側にも時間とゆとりがないということではできないが、「言われたから」「ルールだから」で終わるのではなく、「なぜなの？」というところをちゃんと確認して振り返られる環境が大事だと思う。

③月岡英明委員

テーマ「ふるさと教育を指向した ESD の推進を ～魅力ある、誇りある須坂市を創造する人材の育成～」

- 私は「魅力ある、誇りある須坂市」をキーワードにしたい。須坂市を創造する人材の育成。そのため故郷教育を志向した ESD の推進を提案する。
- 故郷の学び、故郷を学ぶ。この資料にある学びの中から須坂市への愛着が生まれてくるのだと思う。
- しかし、単に故郷について学習するのではなく、持続可能な地域社会の担い手を育成する ESD の視点を取り入れることによって「探求する力」、「課題を克服する力」、「多様な他者と共同する力」が育成されると考えている。
- ESD とは Education for Sustainable Development の略で単に「持続可能な開発のための教育」と訳されているが、ESD が学指導要領の根底にある理念である。
- 私は、須坂市においては「魅力ある須坂、誇りある須坂を創造し、担う力を育む教育」という風に訳したいと考えている。
- 新しい学習指導要領自体が、持続可能な社会の創り手となることができるような子どもを育成するのだと書いている。そのような子どもが社会の担い手となるように支援していかないと、生き残ることができない位、厳しい時代が迫っているということを前提としている。
- 持続可能性を問われるということは、世の中に持続不可能な状況がたくさんごめいているということ認識しなければならない。
- 昨年、全国教頭研究大会に参加して、「身近な環境との関わりを通じ、持続可能な社会の担い手となる子どもの育成」というサブテーマに驚いた。既に ESD を意識した教育が全国規模で展開されようとしている。
- 持続可能な地域社会の担い手を育成する観点で、この資料にあるような「学びを

整理し、総合的な学習を中核に据えながら教科を学び、学びをデザインする」のが ESD。

- 須坂市は面白いまちで、学習素材となりそうなものがたくさんある。先生方は意外と知らない。知らないと教材化はできない。それではいけないと思い、学校で研修を進めている。市の生涯学習センターとの連携はおおいに力となる。
- 「故郷須坂の魅力に触れ、課題を捉え発信していく ESD」を展開することで「故郷の魅力に触れ、人々に憧れてアイデンティティが調整される。それらがいつか「須坂に生まれてよかった」、「須坂で暮らしたい」、「いつか須坂に帰ってきたい」というような願いにつながる。
- ESD の授業を進めると子ども達が多様なアイデアを出し合いその価値を検討し合う。そこから互いの意見、考え方、生き方を尊重し認め合う信頼し合う人間関係が育つ。だから、いじめや暴力も減るのではないかと思う。
- 総合的な学習の時間の取り組みと学力の関係について見ていきたい。平成27年の全国学力学習状況調査（6年生）で、「総合的な学習の時間に自分で課題を立て、情報を集め整理し発表する学習活動に取り組んでいますか」とのアンケートの問いに「当てはまる」と答えた子ほど学力が高いという結果が出た。
- 国語 AB、算数 AB、理科、それぞれの結果で「総合的は学習でしっかり取り組んだ」子ほど学力が高い結果が出ている。中学3年生でも同じ傾向が出た。
- ESD を教育課程に積極的に導入した東京の先進校では、導入した6年間で全国学力学習状況調査の点が段々に伸びており学力が確実に向上している。
- 森上小では総合的な学習の単元を中央に据えて他の教科との関連性を先生方に意識してもらうため「生活総合カリキュラムマップ」を作成した。教科横断的な学びをデザインするイメージマップになっている。
- これを毎年先生方に作ってもらい実践し、年度末に振り返りをし、次年度に向けて新しいものを作成し引き継ぎ、PDCA サイクルを展開している。
- 本校4年生の防災学習の様子。豊洲小や北相之島地区といった水防の最前地域で昨年の台風災害の現地学習をおこなった。
- この現地学習により災害が身近な問題であること感じ、子どもたちの学びに火が付いた。「防災の町づくり」という観点で学習が進んでいる。持続可能な須坂市であるために、水害に負けず頑張っている皆さんの生きる姿からも学ばせてもらった。
- 学びの成果を発信する機会は学習を更に深いものにする。情報収集、分析、発信する力は、これから生きる子ども達に大変重要な力。
- 森上小では学びの成果を発信する全校一斉の発表の場を設けている。このような発表の機会の創出が須坂市の各校で行われれば、優秀なクラスを集めてのス

ペシャル発表会も可能になる。学びの成果を発表し合い、その成果を共有する善い機会になる。

- 先ほど紹介した東京の先進校では、低学年の時からお客さんの前で発表をしている。低学年から続けていたら6年生ではどうなるのだろうと見ていたら、高学年にいくほど素晴らしい発表となっている。6年になると1人で発表している。
- 最近では ESD を進める際には SDGs との関りを大事に考えるようになってきている。地球規模で課題を捉え、身近な地域でできることから始めてみる。
- 本校でも SDGs 理解の職員研修を実施し、総合的な学習で意識するようになっている。SDGs スタートブックを4年生以上の全員に配布し、SDGs と自分たちがやっていることに何の関りがあるか、ということからスタートしている。
- ユネスコスクールについてだが、ユネスコスクールとは ESD の推進拠点校として位置づけられている。全国では1000校を超えて、年々増えている。近隣では山ノ内町、高山村の小中が、全校ユネスコスクールの認定を受けている。また、信州大学附属小中学校や文化学園長野中高等学校、長野西高校等が認定を受けているが、長野県では認知度が高いとは言えない。
- ユネスコスクールに認定されるまでには様々なハードルがあるが、認定されるとメリットが大きい。
- 長野県では信州大学教育学部内に事務局を持っている信州 ESD コンソーシアムという団体が4年前から立ち上がっている。長野県における ESD の推進、その取り組みや成果の情報発信、交流の拠点となっている。
- 有明海に面する福岡県の大牟田市では、平成24年1月に全ての小中学校が一斉にユネスコスクールに加盟し ESD を推進している。
- 市政における ESD 推進のため、平成28年に ESD 推進本部を市役所内に設置し、市長を本部長、教育長を副本部長、各部局長が本部員となり、各部局が ESD を取り入れて事業を展開している。
- 市民による ESD の推進組織として大牟田市 ESD 推進協議会が平成29年に設立され、市民と行政、学校が一体となり市をあげて ESD を推進している。
- 私は「魅力ある、誇りある須坂市」になるためには、須坂市全校が故郷教育を志向した ESD を積極的に導入し、推進することが有効だと考えている。

④佐藤富美子委員

テーマ「自由進度学習の提案 ～学びたい時に『自分の力で学べる子』を目指して～」

- 私からは、「学びたい時に自分の力で学べる子どもを目指す自由進度学習」について提案する。

- コロナ禍を超えていく学びの改革として県教委から示されたイメージ図には、With コロナ時に学力として「自立して学ぶ力」という言葉がある。3～5月の休校中に子ども達に必要な力であると実感した。
- 自立して学ぶ力を付けるために豊洲小学校では自由進度学習を試行した。個のペースで進める学習、子ども達一人一人が自分らしい学びを展開していくことを念頭に置いている。
- 進め方は、まずガイダンスとして全体計画を提案し、学習への動機づけを大事にする。そして単元学習の計画を各自が立てていく。その後、個人追求に入り自分のペースや方法で納得できるまでおこなう。わからない時は自分で調べたり友達や先生に聞きながら進める。最後はまとめとして全体で定着に向けた確認をおこなう。
- 具体的に3学年算数の重さの単元で話をする。動機づけとして「2年生末でお別れして帰ってきたウサギの重さを測りたい」、これには重さを測ることができる力が必要との動機から重さの学習に入っていった。
- 学習の手引きで「教科書やプリントを何時間目にどの位やるか」という計画を立て、途中途中にチェックポイントがあって、教師が確認を入れながら進めていく。
- 学習の様子。今年度導入したタブレットで、教科書に載っているQRコードを読み、g(グラム)の書き方や量りの読み方を繰り返し見ながらやっている。納得いくまで何度でも学習していく。
- また色々な計量の量りを廊下に並べておいて、どの量りがよいか選びながら測定していく。自分が必要な時に何時でも量ることができるため待つことが減り、自分のペースを維持できる。
- 1kgの量を知るために砂を袋に入れて量っている様子。体感による学び。校庭に出るため全体学習を取り入れ、皆で進めた。単元の途中で必要な時に一斉指導を入れていく。
- 机の上には教科書、自分の今日の課題の学習プリント、タブレットが置かれ、どの子も集中して学習する様子が見られた。
- 教師はどのような立ち位置で、何をしていたかというところ、教師はまず単元構想を立てる。必要な教材や学習プリント等を教材研究しながら準備をする。
- 授業が始まると支援に入る。到達度の確認も重要。
- この単元を終えた時の子ども達の感想。「今まではまだやりたい事があっても次に行ってしまったが、ちゃんと理解して進めることができてよい」、「集中してどんどん進められるし、見たい時に動画が見れたり、量りたい時に量れるのでよい」「先生だけでなく、聞きたい時に友達に聞いて教えてもらえるのがいい」と

プラスで前向きな感想が非常に多く聞かれた。

- このように学習を進める中で子ども達は充実感や達成感を得ることができ、「自分は自分でよい」という安心感の中で進めていく学習は、自己肯定感の高まりにつながっていく。
- 「どう学習を進めたらよいか」という学び方を習得し、「次はこのようにしたい」という願いが醸成されていく事で学習意欲の向上へつながっていく。その積み重ねによって自立して学ぶ力がついていくと、この実践から考えることができる。
- 全体での一斉指導との比較から考察すると、教材研究の充実、個別支援の充実、児童理解の深まりという点での教師としての充実感があり、改めて授業を構成する上での大切な視点を実感することができた。
- 実践した職員からは「これは一斉指導においても大事なこと」、「改めて子ども達から教わった」という言葉が聞かれた。
- 課題として、個に目を向け、個に必要な支援を見極めていく。授業改善の視点として常に考え、繰り返し思考しながら取り組んでいきたいと思う。
- 子ども達は他の学習場面でも変化がある。早く終わってしまい待つことが多かった子どもは、自分のペースでどんどん進めることによって学ぶ楽しさを味わっていた。
- 以前の一斉授業では周囲を見ながら黙って学習していた子どもが、この自由進度学習の後の一斉授業では、挙手して発言し、家に帰った時にお母さんに「今日、いっぱい発言した」と報告した。
- いつも宿題を家族に聞いてやっていた子が、自分で教科書を見ながら調べるようになった。ということも聞くようになった。
- このように主体的に学ぶ姿が見られるようになったことは、自由進度学習が子ども達にもたすものを教えてくれている。
- 自由進度学習の試行を通して、須坂市の子ども達が「自分から求めて学んでいこう」そして「学ぶことが楽しい」と感じる子ども達に育ってくれること大事にしていきたい。

⑤島田浩幸委員

テーマ「新たな学び・つながる子ども ～ICTの活用を通して～」

- 「新たな学び・つながる子ども」をテーマにICTの活用を中心に話を進める。
- 新たな学びについては、文部科学省から出されている「各教科の指導におけるICTの効果的な活用に関する資料」と「GIGAスクール」に関する資料にまとめられている。

- その中では資質・能力の3つの柱をバランスよく育成するための教材・教具、学習ツールの1つとしてICTの積極的な活用が位置づけられている。
- これまでの教育実践の蓄積とICTの効果的な活用により学習活動の一層の充実や主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善が期待されている。
- 1人1台端末の環境が整うことで、双方向型の一斉授業、1人1人に応じた個別学習、互いの考えを即時に共有し、協働しながら学ぶことが可能になっていく。そのような学びのことを私の話の中では新たな学びとして位置づけている。
- 新たな学びの具体としてG suiteを導入した本校の技術科・家庭科の1学期の実践や、その実践から見てきたことを紹介する。
- 1つ目は個別最適化について。家庭科の布を用いた単元では教師が「クラスルーム」というウェブ上の場所に複数の資料を用意し、生徒が個々の進度に応じて自分にとって必要な資料を選ぶことができるようにした。
- ある生徒はスライドで作る手順を確認し、別な生徒は動画で繰り返し再生しながら、縫い方を確かめる姿などが見られた。
- 単元ごとの授業が時系列ごとに表示されているため、必要があれば生徒が前の時間の資料に戻って学ぶことができるように設定している。
- 学習を進めていく中で、振り返りの時間の確保が見えてきた。教師が全体に対して一斉に説明する時間が短くなり、その結果活動する時間が増え、作品の完成も早まっていく、そういった好循環が見えてきた。
- 従来の一斉型の学習の時よりも、思考させたい追求場面や振り返りの時間をより長く確保できる。これはICTを進めながら見えてきた新鮮な発見である。
- 3つ目は共有化。技術科の単元で「私たちが考えた風力発電の羽根」をテーマに、発電効率を共同追求した。グーグルスライドの画面上で、1つのファイルをグループ全員が同時に編集できるようにして、お互いにアイデアを入力し合いながらまとめた。
- どのグループでも必要感のある対話が自然に活発になされて、互いのアイデアや追求結果を共有しながら学ぶ姿が見られとても印象的だった。
- 4つ目は授業と家庭学習の一体化。コロナ禍によって家庭科の調理実習が見通しの経たない状況となった。一方で須坂市では、7月下旬に給食センターの都合で給食が提供できない期間があり、生徒は弁当持参となった。その中で、学校で調理計画を立て、家庭で調理実習をおこなう家庭と学校を一体化させて、全学年で「私のこだわり弁当」という単元を実施した。
- 家庭学習では弁当のレシピを調べたり、学校では調理計画を立て、生徒は大変意欲的に学んでいってくれた。
- 当日、作った弁当を持ってきたときは、互いに弁当を見せ合って評価し合う姿が

見られた。その後、学校からは全く指示もしなかったが9月下旬におこなわれた文化祭で自主的に自作弁当を持参する生徒が複数名確認することができた。

- 5つ目に生徒の意識を基にした導入。アンケート機能を持ったアプリを使い、本日の振り返りと次の授業に向けた意識アンケートを実施した。
- 各生徒が入力して更新すると瞬時にグラフ化されて生徒と共に共有することができる。教師は全員の声や意識を把握したうえで子ども達の意識を基に次の授業の導入等を構想することができる利点がある。
- 今現在は30数台ある生徒用タブレットを各教科が争奪戦のように活用している。1日も早い1人1台のタブレットの実現を心待ちにしている。
- 次に、つながる子どもについて、をテーマに話したい。東3校が直面する課題。仁礼小学校は来年度に初めて200名を割り込み減少を続けていく。令和6年度以降、新入児童数が20名を切っていく状況にある。
- 豊丘小は既に児童数1桁の学年が出てきている。令和6年度以降の新入児童数は3名、2名、4名と激減し、令和8年度の全校児童数は通常の1学級に相当する人数になってしまう。
- 来年度から複式学級の対象となる学年が生じて増加していくが、現行の県基準が引続き維持されていけば、令和6年度までの複式はいずれも解消されていく。しかし、令和7年度以降の1、2年生は確実に複式学級になっていく。
- 仁礼小学校・豊丘小学校を合わせた通常学級数の推移は、両校合わせても、半分の学年は単級の見込み。
- 東中学校は、ここ数年の間は140～150名で推移していくが、令和5年度をピークに減少し、令和12年度には100名を割り込み、更に減少が加速していくと推測している。
- 学級数は来年度に1学級が減少し、数年後には更に減少していく状況。令和6年度の1年生は単級になる見込みで、生徒会が大事にしている縦割り活動が困難になる見込み。
- 令和8年度の1年生は、現時点では2学級の見込みだが、特別支援学級の減級、転出等があれば、早ければ令和8年度から、全学年が1学級になっていく可能性がある。
- 生徒数の減少は学級数の減少につながる。学級数の減少は教員数の減少につながっていく。
- 東中学校が抱えている直近の課題は、来年度、特別支援学級が1学級減になり、通常学級の週のあたりの授業時数が変わらないにも関わらず、教員2名と加配の計2.5名が減となること。
- 教科によっては過酷な授業実数となり、質の高い学びや、きめ細かい支援体制、

時間外勤務の縮減などへの影響が懸念される。

- 東3校の特徴は、仁礼小学校の児童も、豊丘小学校の児童も、いずれは東中学校に入学し、共に学んでいくことになること。
- 今できることとして、例えば合同授業や、2つの小学校が連携して行える活動を積極的に進めていくことが重要。
- 対面する形での相互交流に加えて、ICTを活用して相互に学んでいく環境を整えることが重要。
- 一方で、これほどの減少を考えると、施設一体型の義務教育学校を視野に入れることも必要になっていく。その先のことを考えると、通学区のあり方も検討していくことが必要になる時がくる。
- ICTの活用を進めるうえで提案していきたいことは、市内統一のクラウド使用とアカウントの付与。県教委からも県全体の統一のIDの提案がなされている。
- これにより学びの履歴を引き継げるだとか、全ての児童生徒がつながることが可能になったり、他校の先端の授業を受けることもできる。
- 拠点校や地域キャンパスの発想で学校間をつなぎながら、子ども達の学びを考えていくことも可能になってくる。
- また、保護者を紐づけすることで、リアルタイムで学びの共有が可能になってく、そんな余地もあるのかなと思っている。
- with コロナの中で、ICTやオンライン授業というとビデオ会議ツール等で再び学校が休校になった際の対応と気がちだが、それよりも Society5.0 だとか、変化が激しく予測不可能な社会で生き抜いていく子ども達を育てる仕組みを考えることが今は大事だと思う。それに向けて取り組んでいくことが臨時休業の対応にもつながっていく、という考えでICTを活用していくことが大事。
- ICTの活用によって新たな学びが生まれ、市内の子ども達がつながることで、小中学校のあり方が変わっていくことを期待している。

(2) 意見交換

【久保田委員の質問：保育園のランドデザインの公開状況】

- 保育園のランドデザインは、保護者や地域に公開されているのか。

【須坂保育園中島園長の回答】

- 保護者には年度当初の保護者総会で説明している。
- 地域の来賓には、入園式後の会議でランドデザインや園の特色を話している。
- ただ、広く周知はできていない状況。

【久保田委員の意見】

●市内の保育園を巡回する中で、保育目標に当てはまる子どもの様子が見られた。

① 保育目標「身の回りを清潔にする」

1人の女の子がホールに入る前に手を洗っていた。先生に言われたわけでもなく、講師が言ったわけでもない。自ら考えて行動していた。

② 保育目標「互いの立場や考えを受け入れ尊重すること。人との関わりの中で相手の思いに気が付くこと。」

ドリブルをしながら「だるまさんがころんだ」の時にボールを止めるゲームで、一番遅れてしまった友達に対して、先にゴールインした友達が「頑張れ、頑張れ」と声掛けをしていた。

●今回グランドデザインを初めて知った。社会教育に関わる者も、グランドデザインや教育目標を知っていれば、意図的・友好的・効果的に活用ができるのではないか。子ども達の教育の在り方を考え実践していく中で、社会教育の一端として関わることはできるのではないか。

【伏木座長のまとめ】

- 各保育園・小中学校・須坂高でグランドデザインは公開されている。
- 保護者だけでなく、一般にも分かるような仕組みが必要ではないか。

【勝山委員の質問：個別最適化の実践における課題】

- 佐藤委員に質問をしたい。個別最適化の実践はとても興味深く、切り口も素晴らしいと思う。
- 課題として、教師の立ち位置はどうか。教材観等含めてもう少し課題があれば教えてほしい。画一化された教育が進められるリスクがあるのかどうか知りたい。
- 各教科の特質があり、自由進度になった時に当てはまりやすい教科とそうでない教科があると思う。研究される中で具体的な課題があれば教えて欲しい。

【佐藤委員の回答】

- 一律の学習計画を立てていく。大事にしたいのは「子どもが自分の学びと向き合う」こと。流れはできているが、「どこに」「どの方法で」「どれだけ時間をかけるのか」ということは個人に保障されていく。自分で学んでいくことをどうしていくかを学ぶためには、大事な場面である。
- 当てはまりやすい教科等については、すべての授業を、すべてこの方法で行うということではなく、一斉授業でやるべきところと、同じ教科の中でも自由進度が可能なところの見極めが必要である。
豊洲小学校では以下の教科や場面で、試行している。

- ①算数に取り入れることはできないか。
- ②理科は、学習帳をベースにして取り入れることはできないか。
- ③6年生の社会の歴史人物を調べる場面で取り入れることができないか。
- 「自分で学んでいく」「自分で学習場面や学習方法を選んでいく」という体験を積み上げることを大事にしたい。
- 教師側も単元全部を構成することが大事なのか、教材研究が大事なのか、何か大事なのか奥が深い。伏木先生に聞いてみたい。
- 「自分でやっていく」ことを教師が頭に置いて計画することが大事だと考えて進め始めている。

【伏木座長の補足】

- 個別最適化の中身は佐藤委員が話した通り。
- 個別最適化は、1970年代後半のオープン教育が始まった頃に、愛知県緒川小学校の実践が皮切りになる。近年、全国的に自由進度学習が広まっている。
- 取り掛かりやすい科目・単元はあるかということ、すべての教科・単元で可能である。しかし、学校規模や環境・教員の得意不得意でやりやすいものとやりにくいものはある。
- 本日の発表は、ひとつの単元を、「子どもが自由に」「自分のペースで」「自分のやり方で」学習することを優先したスタンダードな取組である。
- これが進むと、2教科同時並行で単元内自由進度学習に取り組むようになる。
「この時間には社会をやってもいいし算数をやってもいい」というように教科を選択したり、同じ算数でも「教科書ベースの学び方」と「具体物を使いながらやっていく学び方」に分けたりするやり方がある。
- 子どもが多様であるので、子どもに合わせた取り組みをし、最終的には学習指導要領の目標に到達していくという複数コース設定の場合があるかと思う。
- 課題としての勝山委員の懸念は、一斉画一的なものにならないかということだが、私たちが何年か取り組む中でその心配はないように思う。
- 一番の課題は、教員の意識である。どうしても教えたくなる。きちんと指導したくなり、子どもは基礎的な知識を身につけないと自分ではできないだろうという思い込みがある。こうした教員の善意の意識が邪魔して自由進度学習に入っていけない。
- 佐藤委員から紹介があった通り、実際にやってみると、子ども達が生き生き学び、自信を付けていくので、その姿を見て教員が変わっていくという学校が多い。
- 教員が良かれと思って、共通の内容を、「一つの方法」「特定の時間」「特定のや

り方」でルールを敷いて、責任をもってきちんと指導してきたやり方に限界がある。子どもは多様であり、そのやり方に合う子どももいるが、その中でいつも自信を失い、ついていけず、あるいは退屈してしまう子ども達がいたはず。それを打破する取り組みが佐藤委員の学校で取り組まれている。

- このやり方で行うと、必要な時間数は少し早めに終わる。8割程度の時間で出来てしまうので、残りの2割を応用的な問題やチャレンジ的な問題を用意することになる。
- すべてこの方法でやる必要はない。いくつかの単元で取り組むことで、子ども達が「自分の学びを自分で作っていく」という経験が学校の中でできる。
- 自由進度学習が定着している学校は、家庭学習を自分でやれるため、コロナ禍でも困らなかった。

【山岸委員の質問：家庭と連携したかったこと・ICTで活用したかったこと】

- 須坂市は幼保小の連携に非常に力を入れている。垂澤委員から、家庭との連携で問題があると話があった。連携という言葉が非常に漠然になる場面が多いと思う。
- コロナ禍の中で幼保小中の「連携をしたかったこと」あるいは「IT活用で何かできることはなかったのか・やりたかったができなかった」場面はあるか。
- 島田委員の項目「最大限に活用する視点」は非常に大事になると思う。具体的に「やりたかったけどできなかった」という事例があったら教えていただきたい。

【垂澤委員の回答】

- 4月の段階で、子ども達が登園できなかつた中で、親と先生がどのように信頼関係を築くかということが一番の課題だった。オンライン環境がそれほど整っていなかったのもう少しなんとかできればよかったと思っている。

【本多委員の意見】

- 5名の発表で共通して感じたことは、子ども・生徒達の「主体性」に、「直接体感」や「直接的人間関係」が大きく関わってくるということだった。直接的な体感や直接的人間関係から子ども達の主体性が生まれると改めて分かった。
- また、主体性がなかなか生まれてこない要因としては、「大人の関与の仕方」「大人の関与の在り方」が関係し、子供の主体性を阻んでいるのではないかと感じている。できるだけ口を出さない・手を出さない等大人の我慢がとても大事だと感じた。
- 高校生を見ていて「逞しさとは何だろうか」といつも感じるが、いつの時代も予

測不可能であることは間違いない。これからの子ども達が逞しく生きてもらうには、多様な価値観を持った多様な他者と協働して生きていく力が必要であると思う。

- これまでの成長過程の中で、大人が口を出しすぎる・教えすぎる・手を出しすぎるにより、主体性をすべて奪われてしまう。教育現場で、直接体感や直接的人間関係の場を与えていても、保護者とか教員、あるいはまわりの大人たちの関与の仕方が過干渉すぎると感じている。
- ICTといったデジタル的なことが強調されている中で、直接的人間関係とか体感といった、アナログ的なことの大切さが、あらためてクローズアップされてきたと感じる。
- 須坂高校では、先生方に部活動のあり方について明確に文書で示している。部活動とは、「自主自立の精神」と「自治の技術を学ぶところ」と定義している。ところが、勝利至上主義の保護者や教員が口を出しすぎる。指示命令を出しすぎてしまう。その中では、主体性などまったくない、ただ従う人間だけが育ってしまう。
- 大事なことは、たとえ負けてもいいから、下手になってもいいから自分達で考えること。それによって、多様な価値観や多様な他者と共存して生きていく逞しさが身に付くのではないか。
- 発表者の現場では、生徒の主体性を大事にして、自分で考えるという機会を与えているのだと感じ、これからの日本は明るいな、また須坂は大丈夫だと思った。

【伏木座長の質問：G Suiteについて】

- 島田委員に質問したい。G Suiteのアカウントは学校単位か。

【島田委員の回答】

- 学校のものである。これのみでは他校との繋がり是不十分。閉ざされた中では十分だが、少なくとも須坂市として統一して進めていくことが必要だと思う。

【伏木座長の整理】

- 1点目。垂澤委員から発表があったアフターコロナについて。コロナで気が付いたことが沢山あった。ピンチをチャンスにできたことが色々あった。色々なことをやめた。コロナが明けたらどうするのか。戻るのか。本当に必要なことは何かを考えて止めたものが、コロナが収束した時また戻るのだろうか。小林教育長の方稿にも「やってもやらなくてもいいものはやらないほうがいい」とある。教員と保育士の多忙化の問題も考えたい。

- 他の町の保育士がこう話していた。今年は行事をことごとく止めた、できなかったが保育がすごく充実し、子どもをしっかり見られるようになった。子どもがのびのびと遊べるようになった。いかに自分達が行事に追われていたのかと気付いた。行事にも意味はあるが、誰のための何のものだったのか考えさせられた…とのこと。垂澤委員の話と重なるものがある。世の中はまた（コロナ前に）戻すところが多いかもしれない。須坂はどうするかという議論はどこかでやらなければならない。
- 2点目。本多委員からも話があったが、教育内容と方法について。子どもの主体性を育むためにも、大人が口出ししすぎないこと、子どもに試行錯誤をさせること、体験をさせるということが大切。この一つにICTも係るようになると思うが、この路線を幼保小中高に繋げていくことはできないか、この辺の論理を整理する必要がある。
- 4点目。今後はICTを使用して同じ学校の教員でなくても教科会ができるかもしれない。子ども同士の学び合いも、生徒会同士、児童会同士で行うことなど、すでに国内の小規模校で始めている。
- その他にも、ICTを使用して同じ学校の教員でなくても教科会ができるかもしれない。子ども同士の学び合いも、生徒会同士、児童会同士で行うことなど、すでに国内の小規模校で始めている。
- そう考えると、須坂市が共通のドメインを取得すること。「G Suite」「Google For Education」は、自治体がまとめて申請すれば、無料で取得することができる。広島県教育委員会は30万人まとめて申請取得した。奈良県も同様に動き出した。長野県教育委員会もまとめて取得しているので、県立学校の教員や生徒が個人のメールアドレスを取得していて、県立学校を異動しても変わらず使える仕組みになった。例えば、須坂高校と長野高校の先生同士が、一緒に教科研究や教材をシェアすることが可能。生徒同士が学びあうことも理論的にはできる。後は、やるかやらないかのみ。
- 東中の取組みと同じことを信州大学の授業で行っている。こんなことまでできるのかということまで今はできる。人口減少等いろいろなことを考えると、この仕組みは使っていないと周回遅れになるだろうと思う。積極的に教育委員会でまとめて市内の教員や子ども全員を登録して、クラウド上でデータ管理できる新たなガイドラインを作成していく必要がある。
- 何が危険で、何が安全で、何が便利かは、大人も学ばなければならない。使い方やリスク、セキュリティを同時に学ばなければならなければならない。現在は、何も危険なことをさせないので、先生達が何も心配しなくていいセキュリティが確保されるから何も学ばない。これでは今後の時代についていけない。教育長中心に

どこかで議論する必要がある。

- 羽生田委員からお話があったように、G I G Aスクール構想やI C Tが日常化し、日常的な道具になった時代だからこそ、人と人との直接的な繋がりや子どもの地域の中でのリアルな体験が大事になった。オンライン授業を実施するなかで、「対面授業ならではの良さは何だろう」「学校に来ることの良さは何だろう」と皆が考えたはず。そのことを、新しい教育大綱の中で踏まえる必要がある。
- 以上4点、整理させていただく。

【小林教育長のお話】

- 一言御礼を申し上げたい。充実したレポート発表をいただきありがたい。頭の中が飽和状態になっている。自分が知らなかった・考えなかったことが入ってきた時の「整理する時間がほしいな」という気持ちになった。
- 伏木先生から4点の大きな課題をいただいた。教育委員会としても、また現場と相談しても、考えていきたい。
- 5名の委員の発表は、視点がそれぞれ異なるが、大切なことだとしみじみに感じた。
- 私のレポートの中で、「練習をしなかった卒業式がどうしてきちんとできるのか」、まとめさせてもらっている。
- 子ども達は1～5年の間、ずっと先輩達が卒業式で何をしてきて、どのような所作するかを勉強してきた。だから頭の中に入っている。
- 私達が教えてきたことは何か。礼の仕方の角度を、一生懸命教えてきた。一人か二人ができなければ、その子がきちんとできるまで、全体の流れをストップさせながら指導しなければならなかった。うまくできない子ども達に対して「困った、困った」と言ってきた。
- でも、大事なことは、子どもが、校長先生の顔を見て、大きな声でお礼を言い、しっかり賞状を受け取るという、そういう心情なのではないか。と思った時に、「あってもなくてもいいものは、なくてもいい」という相田みつをさんの言葉を思い出した。
- 今日の話し合いは、もう一回自分で整理し直して、次に向かっていきたい。委員の皆さんも、この後自分の中にわいてきたことがあったら教育委員会まで寄せていただきたい。
- 伏木先生にはいつも時間がない中で、端的にまとめていただいて大変にありがたい。
- 以上で終了としたい。

(3) 次回内容について

- 第4回の開催は、12月23日（水）午前9時30分に変更。
- 第5回の開催は、2月16日（火）午前9時30分に変更。場所は後日。

4 その他

- 会議録の作り方は、一言一句ではなく箇条書きでまとめることとする。

5 閉 会（関教育次長）